

東海の古代

第258号 2022年2月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp メルアド変更
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

乙巳の変以後の蘇我氏

一宮市 畑田 寿一

乙巳の変により蘇我馬子を中心とする蘇我氏宗家は滅んだ。しかし、石川麻呂を中心とする他の蘇我氏は依然健在で、大臣を続出し、天皇家に嫁ぐ妃は絶えなかった。

今回は天智朝から天武朝への政治の激動期に内部抗争を抱えながら勢力を維持し続けた蘇我氏について、時代を追って俯瞰してみたい。

1 7世紀の東アジア

618年に中国では隋に代わって唐が建国した。唐はしばらく国内の統一に専念していたが、その隙を突き朝鮮半島では高句麗が勢力を増して南下を始める。これにつられて百済も南下し、伽耶地域に勢力を伸ばすに至り、倭国にも影響が及ぶようになった。664年に唐が高句麗に派兵するころ、乙巳の変が発生している。乙巳の変は蘇我氏の専横ばかりでなく、このままでは唐や朝鮮半島諸国の属国になり兼ねないとする危機感が働いたと思われる。

乙巳の変の時、古人兄皇子は事件当時皇極天皇の側にいた。この惨状をみて自宅に逃げ帰り、『韓人、鞍作臣を殺しつ、吾が心痛し。』と言って寝室に入り、門を閉じて閉じこもった。」と『日本書紀』(以下書記)に記されている。しかし、馬子を殺害したのは中大兄皇子と佐伯連子麻呂、葛城稚犬養連網田であり、渡来人ではない。更に書紀の編者は「韓の政ごとを真似た政治が原因で誅する。」とする注を書き加えている。「政治は天皇を中心とした体制」で行うべきで、権力がある者が取って代わる様な政治体制は邪道である」とする主義を主張しているが、いずれも後世の潤色の色が濃い。乙巳の変は国際情勢が背景にあると考えられる。

2 新政権樹立後の体制

中大兄皇子と中臣鎌足は協議の結果、非蘇我系の軽王を孝徳天皇として立てた。新政権の構成は次のようであったと考えられる。

- 非蘇我系 孝徳天皇、中大兄皇子、中臣鎌足、阿倍内麻呂
- 蘇我系 蘇我倉山田石川麻呂、日向、連子、赤兄、果安
- ブレン 旻(日文)、高向玄理

双方の対立状態を緩和するため、蘇我氏の女性と阿倍氏の女性が動員されて双方の妃に

なり、均衡政権が樹立された。中大兄皇子は政権を奪取したとは言え、諸侯を説得するには蘇我氏の力を必要とした結果、上記のような体制になったと考えられる。

① 孝徳天皇の妃

区分	妃名	出身（親、関係者）	子供
皇后	間人皇女	舒明天皇	
妃	阿倍小足媛	阿倍内麻呂	有間皇子
妃	蘇我乳娘	蘇我石川麻呂	

② 中大兄皇子の妃

区分	妃名	出身（親、関係者）	子供
皇后	倭姫王	古人大兄皇子	
夫人	蘇我我遠智娘	蘇我石川麻呂	太田皇女、鷗野讚良皇女他
夫人	蘇我姪娘	蘇我石川麻呂	御名部皇女、阿閑皇女
嬪	蘇我常陸娘	蘇我赤兄	山辺皇女
嬪	阿倍橘娘	阿倍倉梯麻呂	明日香皇女、新田部皇女
夫人	道君伊羅都売	道君氏	志貴皇子

(注) 上記の他、采女1，宮人2

① 蘇我石川麻呂の失脚

上記の体制で政権は無事スタートしたように見えたが、内情は蘇我石川麻呂を始めとする5兄弟の内紛が絶えなかった。

蘇我石川麻呂は日向の讒言により孝徳天皇により討たれる結果を招き、その後、日向の言が誤りであることが知れると、日向は九州に飛ばされた。通説では蘇我氏の内紛の説を採るが、阿倍内麻呂の死亡時期に重なっており、その後、巨勢氏と大伴氏が左右の内大臣に昇格している点から、蘇我、阿倍の勢力を削ぐ、中大兄皇子の謀略と考える説もある。

② 有間皇子の変

蘇我石川麻呂亡き後、連子と赤兄が蘇我氏の後継者として浮上する。赤兄は天皇の後継者として最右翼にある阿倍内麻呂系の有間皇子の失脚を企み、見事成功を収めた(658年)。蘇我常陸娘(赤兄の女)が中大兄皇子の妃になったのが同時代と考えられており、中大兄皇子からみて論功行賞の意味合いが高い。

3 壬申の乱の騒動

以上、天智天皇の時代の蘇我氏の動きを眺めてきた。内紛により実力者は代わったが、依然、赤兄らが他を圧する勢力を保ち続けていたことが窺われる。天智十年の組閣において蘇我赤兄(左大臣)、蘇我果安(御史大夫)が入閣を果たしており、勢力は頂点に達した。しかし、壬申の乱により体制が一変する。残っていた3系統の蘇我氏の内、赤兄と果安の系統は政治生命を絶たれ、連子の系列の安麻呂兄弟が残るのみとなった。

4 天武朝における蘇我氏

天武天皇は壬申の乱により政権を奪取した。しかし、旧勢力との協調を余儀なくされ、天智天皇の娘4名、藤原鎌足の娘2名、蘇我赤兄の娘1名で後室を構成した。即位前の妃の額田王達も引き続き妃であったと思われる。壬申の乱により流刑になった赤兄の娘がなぜ妃になっているかは諸説があるが不明である。子の穂積親王が715年に没していることから、恐らく妃に迎えた時期が壬申の乱(672年)以前であったのではないかと推測される。

○大海人皇子の妃

区分	妃名	出身（親、関係者）	子供
皇后	鸕野讚良皇女	天智天皇	草壁皇子
妃	太田皇女	天智天皇	大伯皇女、大津皇子
妃	大江皇女	天智天皇	長皇子、弓削皇子
妃	新田部皇女	天智天皇	舍人皇子
夫人	氷上娘	藤原鎌足	但馬皇女
夫人	五百重娘	藤原鎌足	新田部皇子
夫人	大蕤娘	蘇我赤兄	穗積親王・紀皇女・田形皇女

天武の子の時代になっても天皇家が蘇我氏の女性を後に迎えることは続き、高市皇子、草壁皇子、大津皇子、文武天皇いずれもが自ら蘇我氏の血を引くか蘇我系の妃を迎えている。しかし、藤原氏の台頭により、文武天皇を最後に蘇我氏系の妃の登場は無くなった。

通説では蘇我系皇族は長屋王の変（729年）で断絶したとされている。しかし、安麻呂の孫の年足が749年に参議に就任していることから、官僚としての地位は保っており、真偽の程は図り兼ねるが、現在まで連綿と続くとされている。

5 まとめ

以上、2回に亘り蘇我氏の台頭から衰退までの歴史を眺めてきた。歴史の激動期にあってその政治生命を持ち続けてきた秘密は3つの多重構造にあったと言える。1つは権力基盤の多重構造で、いずれかの系統が失脚しても直ぐに違う系統が取って代わり権力の座を離さなかった。2つ目は経済基盤の多重構造で大化の改新により私有地が制限され、渡来人を中心とした評制の拡大の中で、いち早く自分の配下を地方に分散し、土地の国有化を防いだ。最後は天皇家との関係の多重化で、天皇になり得ないと思われる傍系の王とも婚姻を結び、政権交代に備えた。このことは後の藤原氏にも通じ、覇道の基本であろう。

天武天皇の後

名古屋市 石田 泉城

1 はじめに

前号の「東海の古代」257号では、小林^{やすこ}恵子の『白村江の戦いと壬申の乱』（現代思想新社、1987年）の内容を批判しながら、大海人皇子（以下大海人）は630年代前半が生年であること、海人族である大海（凡海）氏を背景にした大海人の諱、大海人は外国人ではないことに関して述べました。

このほかに大海人に関して注目される疑念は、天武天皇は、なぜ天智天皇の娘を多数妻にしているのかであり、これについて以下に見つめ直します。（以下天皇の表記を省略）

2 兄弟関係

あらためて申せば、中世の古文書では、天智・天武の兄弟関係は揺るぎません。

たとえば、『扶桑略記』では、天智は「舒明天皇第二子。母齊明天皇也」とあり、天武は「舒明天皇第三男。母齊明天皇也」とあって、兄の天智、弟の天武の兄弟関係に変わりはありません。また、『本朝皇胤紹運録』では、天智は天智十年（671年）に58歳で崩御したとあり、天武は朱鳥元年（686年）に65歳で崩御したとありますので、天智の方が8歳年上となり、やはり兄弟関係に逆転は認められません。つまり、中世の古文書の同一文献

内では天智・天武の兄弟の関係は変わりません。ですから『本朝皇胤紹運録』の天武の崩御した年令だけを切り取って論じる方法は論理の公平性から全く不適切といえます。

3 大海人の支援者

大海人の諱の字面は、神話に登場する海の神様、大海神おおわたつみを想起させます。

天智の治世当時、皇子の名前は乳母の姓を付ける慣わしであったとされ、大海人の乳母は、古来より漁業や航海などに携わった海部あまへや海人部あまのへに由来する尾張郡海部郷の出身とされます。海部は、海人族によって組織され、海上交通上の要衝に置かれていたようで、尾張郡海部郷のみならず列島に広く行き渡っています。

海部氏は、『尾張国熱田太神宮縁起』に「海部是尾張氏別姓也」とあり尾張氏の別姓であり、安曇氏とともに海人勢力です。

書紀によれば、大海宿禰荒蒲おおあまのすくねあらかまが大海人の養育に関わっており、この大海（凡海）氏も、言うなれば尾張氏と同族の海人勢力であり、また壬申の乱においては「尾張國司守小子部連鉏鉤、率二萬衆歸之」（尾張國司が二万の軍衆を率いて帰順した）とあり、尾張氏が大海人の味方となって天皇即位に尽力しています。

したがって、大海人は、尾張氏などの海人勢力を支援者としたのは間違いないでしょう。

4 天武の後

(1) 権力者との結びつき

天武の後や女官については次のとおりです。

- 皇后：鸕野讚良皇女 - 天智天皇皇女、後の持統天皇
- 妃：大田皇女 - 天智天皇皇女、鸕野讚良皇女同母姉
- 妃：大江皇女 - 天智天皇皇女、鸕野讚良皇女異母妹
- 妃：新田部皇女 - 天智天皇皇女、鸕野讚良皇女異母妹
- 夫人：氷上娘 - 藤原鎌足女
- 夫人：五百重娘 - 藤原鎌足女、氷上娘の妹、後に藤原不比等妻
- 夫人：大薺娘 - 蘇我赤兄女
- 嬪：額田王 - 鏡王女
- 嬪：尼子娘 - 胸形徳善女
- 嬪：かじ媛娘 - 穴人大麻呂女

天智の皇女の4人は、天武の皇后と妃になっており、実兄の娘を多く娶っていることを疑問とする意見があります。

これを理由に天智・天武は兄弟の関係ではなかったというのが近頃流行の説で、小林恵子やすこも同じく、兄弟否定説です。しかし、天智の皇女が天武に複数嫁いでいることを直ちに天智・天武が兄弟ではないとするのは早計ではないでしょうか。

最高権力者との結び付きを強くして、自身や一族の力を保持しようとするのは、現代においてもよくある手段です。

大海人は、672年の壬申の乱で、大友皇子（弘文天皇）を倒し、その翌年の673年に即位しています。そこで藤原氏も蘇我氏も天武にそれぞれ娘を夫人として嫁がせています。とすると壬申の乱で負けた天智側も最高権力者となった天武に天智の娘を嫁がせ力を保持しようとするのは当然であり、これによって現に天智の娘のうち、持統と元明の2人が天皇になっていますし、天武直系の子孫の称徳天皇の後は天智系の天皇になっています。このように最高権力者との関係を強化していくことで、天智と天武は、後代に至るまで天皇家の血筋を保っており、また、藤原氏や蘇我氏も天皇家と密接に結びつくことで一族が権力

の中枢に居続けるようにしているのです。

つまり、天智の4人の娘は権謀術数の側面があると考えerべきでしょう。

(2) 親のいない娘の面倒

もう一つの見方としては、天武は亡くなった天智の娘を引き取ったというものです。

生き残った方の権力者は、親が亡くなった娘を自らの妻として引き取るという事例はよくある話です。たとえば、天智天皇は、乙巳の変のあとに、舒明の第一皇子である古人大兄皇子を殺害しますが、その際には残ったその娘の倭姫をいおえのいらつめ引き取って皇后としています。

藤原不比等も天武の没後に藤原鎌足の子で異母妹である五百重娘を引き取って妻に迎えています。

天武が天智の実弟であるとすれば、亡くなった実兄の娘の面倒をみるというのも当然といえます。鷓野讚良皇女の姉の大田皇女は、斉明二年(656年)に、天武の妃となっており、これは天智の采配によるものです。鷓野讚良皇女は、13歳で天武に嫁いだとされ、鷓野讚良皇女の異母妹の大江皇女と新田部皇女も、天武二年(673年)に天武の妃となっており、天武は、これらの天智の3子女を引き取ったということではないかと考えられます。大田皇女は早世しなければ天武の皇后となっていたことでしょう。

5 まとめ

天武が天智の娘4人を妻にしたのは、天智側の権謀術数の側面とともに、亡くなった実兄の娘を引き取り面倒を見たという、両方の要因があると考えられます。

『懐風藻』の分析

刈谷市 酒井 誠

『懐風藻』は『日本書紀』(以下、書紀)と比較しても、その中に含まれる人物関係や時代区分を見ても大きな矛盾は見つからない。しかし、書紀の最終編纂段階において、その指導的な立場にあった藤原不比等の健康状態は極めて計算外の出来事であったと思われる。そのために書紀は、極めて複雑な人間関係を演出しなければおさまらない事態を招いた。

天皇制は天武天皇の時代からで、それ以前にもはるか昔から国民には天皇制があったこと示したかったのであるが、つじつまの合うような天皇や皇族の配置や出来事を結び付けて、歴史を映し出すことは困難であった。そのほころびが、書紀を取り巻く同時代の文献である『古事記』、『風土記』、『万葉集』、『懐風藻』などに、どう考えても納得のできないような現実が見いだされてしまう。

1 『懐風藻』の序より

『懐風藻』の序の部分を見ると、過去の天皇の偉業や、日本の歴史が東アジアの朝鮮との緊密な関係で形づくられてきたことを物語っている。その文章を現代語訳で表してみる。

はるか昔の聖人君子のことばを拝聴し、遠い昔の書物を見ると、瓊々杵尊が日向の高千穂にお降りなされた時、神武天皇が大和の橿原に都を造られた頃は、ようやく造化の神が万物を造り出されたばかりで、社会の文化・制度は作られていなかった。神功皇后が朝鮮を征伐され、応神天皇が即位されるにおよび、百済は貢ぎ物を持って来朝し、書物を軽の宮の厩坂にひらかれ、高麗は上奏文を捧げて来朝し、書物に鳥の羽で文字を記したてまつった。王仁は応神天皇の御代、都の軽島で知識に暗い者を教え導き、王辰爾は敏達天皇の

御代、都の訳田で文字を教え広めた。その結果、社会に孔子の学風が広まり、人々は孔子の学問を学ぶようになった。

聖徳太子が摂政となられ、官位を十二階にさだめ、はじめて礼と義の法を制定された。しかし主力は仏教に注がれ、詩文を作られる暇はなかった。先帝の天智天皇が天子の位につかれて、ご事業を広め、はかりごとを開き上げられた。天子の道は広くこの世に達し、ご功業は天地に輝いた。

そこでお思いになることには、風俗を調べ、人民を教化するには、学問よりまさるものではなく、徳を養い、身を立派にするには、学問より先に立つものはないと。そこで学校を建て、秀才を集めて、五つの礼儀や、もろもろの法度を定められた。法律規則の広く大きいことと云ったら、遠い昔から現代に至るまで見たことがない。

こうして壮大な宮殿を建てられ、国家は繁栄し、無為の状態によく治まり、朝廷には暇も多くできた。しばしば文学愛好の士を招いて、時折り酒宴の遊びを開かれた。この時にあたり天子自ら文を作られ、賢士たちは讚美の詞をたてまつった。美しく飾った文章はたんに百と数えるだけではない。ただ時世に乱れがあって、詩文はことごとく焼けてしまった。そこで、詩文の亡びなくなってしまうのに心を痛めていた。

さて壬申の乱以降も文筆をとる者が間々輩出した。まだ帝位につかれない皇子としての大津皇子は雄大な詩を歌い、気品高い文武天皇は月の夜に霧の渚に舟を浮かべられた詩を歌い、大神中納言は白鬚を嘆く詩を歌い、太政大臣の藤原不比等は造化の理にかなった治政治を歌うなど、詩の名篇は前の時代よりも数多く、詩人の名声は後の時代に長く伝えた。

私は官位が低く、官吏としての余暇を利用して、心を文学の庭に遊ばせていた。昔の人の遺した跡を見、風月に昔の人たちの遊びを思いしのんだ。故人の消息ははるかに遠いが、しかし残った詩文がここにある。すぐれた詩文をおしいたいて遠い昔を思うと、涙がはらはらと流れ落ちる。美しい詩文をさがして遠くたずねまわり、個人詠んだ詩文がむなしく散り去ってしまうのを惜しく思う。

そこで残っていた詩文を取りおさめ、逸文を集めた。遠く天智天皇の御代より平城京、奈良時代にいたるまでの百二十篇、収めて一卷とした。作者は六十四人、こまかに姓名を記し、出身地や官位を一篇のはじめに置いた。わたしが詩文を撰び集めた心は、先人賢士の残された教えを忘れないようにしようと思ったためである。そのようなわけで懐風と名をつけたのである。時は天平勝宝三年辛卯の冬十一月である。

参考文献：『懐風藻』（江口孝夫、講談社学術文庫、2000年）

2 序の考察

ここに述べられたように、天皇の政治をべた褒めし、日本の文化も順調に育ってきており、特に最後の文章を見ると、藤原不比等の活躍が褒めちぎってある。現代の文学者と呼ばれる人や江口孝夫氏もこの序を肯定的に受け止め、何ら批判的な捉え方はしていない。

撰者として一番に可能性がある人物として淡海三船が挙げられるが、本人の作品は上程されていない。後の時代の作品である、淳和天皇の勅命で編纂された「経国集」には、淡海三船の作品が五点載せられている。五言絶句が四点と五言律詩が一点である。どうして淡海三船の撰とされるのかを説明した文献にはお目にかかれなかった。近江京で作られた多くの作品があったが戦火で焼失したことになる。しかし、発掘調査では、それほどの火災の後は見つからずに、元々天智天皇の作品などなかったのではないか。

3 内容の考察

ストーリーから見てゆくと、書紀に対して矛盾となるようなところは全くない。どちらかと言えば、書紀よりもさらに詳しく掘り下げて、事実を補足している傾向にある。書紀が当時の権力者側の設計図であるならば、補強資料としては申し分がない。

4 作品の順番

この序文と比較して、作品の順序立てについては、いささか問題を感じる。大友皇子、川島（河嶋）皇子、大津皇子、葛野王の順に配置されている。この四人の皇子については、「不幸な末路」をイメージする歴史が存在する。

5 四人の作品等を紐解く。

① 大友皇子の作品

『懐風藻』の最初の作品がどうして壬申の乱で自害した大友皇子なのかわからない。

『懐風藻』を編纂したのが、淡海三船であるならば、大友皇子の直系の子孫にあたる者が『懐風藻』を作り、しかもその最初に大友皇子の作品を持ってきたのか不可解である。確かに詩集の題名からして、古を偲んで作った歌であるから悪くはないが、序にあるように天皇の業績をたたえて作ったとあるように、また、近江京の時代に至ってゆとりが生まれたので、漢詩を読む慣習が生まれたとあるではないか。天智天皇の漢詩が最初に来るならば納得がゆく。

また、かねがね疑問を抱いていたのは、壬申の乱の中心人物の末裔は根絶やしになっても不思議ではないのに、葛野王は、飛鳥に戻って悠然と人生を謳歌している。書紀が記録する多くの皇族の謀反に対する処刑の姿と重ならない。

② 川島（河嶋）皇子の作品

川島皇子もわからない人物である。天智天皇や大津の皇子の存在を示すために作られた人物のようにしか見えない。川島皇子は、天智天皇の次男、つまり大友皇子の弟である。その川島皇子は、大津の皇子の謀反を密告したことで有名である。その密告した川島皇子の漢詩が二番目に登場する。しかも、続いての作品が、密告されて自害した大津皇子である。その5年後に死去している。

③ 大津皇子の作品

そしてここでも四首のうちの一つに辞世の漢詩が載っている。死に臨んでこれほど冷静に歌が作られることは考えられない。他の人が作った歌であろう。

五言 臨終 一絶 金烏臨西舎 鼓声催短命 泉路無賓主 此夕誰家向

日は西の家々を照らし鼓の音は短命をせきたてる。旅立ちに客も主もなし。

この夕べに私は家を離れ（冥土へ）向かう。

④ 葛野王^{かどの}の主張

王子は淡海帝の孫、大友皇子の長子なり。母は淨御原の帝の長女十市内親王なり。器範は宏貌、風鑿は秀遠にして、材は棟幹に稱ひ、地は帝戚を兼ね。少くして學を好み、博く經史に渉る。頗る文を屬することを愛し、兼ねて書画を能くす。淨原帝の嫡孫にして淨太肆を授けられ、治部卿を拜せられる。

高市皇子薨じて後、皇太后、王公卿士を禁中に引きて、日嗣を立てむことを謀る。時に群臣は各私好を挾みて、衆議紛紜たり。王子進奏して曰く「我國家の法たるや、神代より此の典を以つて、仰いで天心を論ず。誰か能く敢へて測らむ。然も人事を以つて之を推さば、從來子孫相承して、以て天位を襲ぐ。若し兄弟相及ぼさば、則ち亂れむ。聖嗣、自然に定まれり。此の外誰か敢へて間然せむや」と。弓削皇子（大津皇子の弟）座に在り、言ふこと有らむと欲す。王子これを叱して乃ち止む。皇太后、其の一言にて國を定むることを嘉して、特闕して正四位を授け、式部卿に拜す。時に年三十七。

<考察>

「衆議紛紜」の際の「王子進奏」は、高市皇子が亡くなってから天武天皇の後継者を話し合う席にて、葛野王が宣言した言葉である。草壁の皇子は亡くなっており、文武天皇は

幼く、話し合いが紛糾した場面で、それはもちろん「草壁の皇子の子供の文武天皇が後継である。」ことを述べた部分である。この宣言が今の「皇室典範」につながっており、簡単に兄弟で譲位できず、男子しか天皇になれない原因にもなっている。また、葛野王は、確かに天武天皇の孫ではあるが、周りを天武天皇の皇子に囲まれてここまで言える発言権があるのだろうか。僭越である。

<皇室典範>

第一条 皇位は、皇統に属する男系の男子が、これを継承する。

第二条 皇位は、左の順序により、皇族に、これを伝える。 以下省略

6 まとめ

(1) 大津の近江京は物理的に存在しなかった。東西400m、南北700m程度の敷地に都などできるはずがない。その都があったと言い張る学者の気が知れない。その発掘に対する姿勢も消極的で、壬申の乱の戦地である「不破の関」の研究者もほとんど存在せず、避けて通っている感じもする。その地に都を築いたのは、諸外国から攻められたときに避難しやすいとか、北にも南にも脱出しやすいという方も見えるが考えが杜撰である。確かに大津市の錦織地区に高床式の建物の跡が見つまっているが、それを天智天皇と結びつけることは危険である。

(2) 書紀に天智天皇の崩御の話は出てこない。したがって、葬儀がどのように執り行われたのかわからず、おかしい。

(3) 近江京にこそ漢詩文学の華が開いたと言っているのに、その華を開かせた張本人の天智天皇の歌がないのが不思議である。しかも一番目に載せられる歌である。

(4) この『懐風藻』は、男の文学であり、女性の作品はない。近江京の繁栄を歌い上げる最高のチャンスでもあるのに、ここで取り上げた漢詩はまだ稚拙で、中国の歌の模倣と思われる歌も多く、男女間の浮ついた歌の多さにはうんざりする。

(5) こうした作品の中で、天皇制の偉大さを示すために、聖徳太子や天智天皇の偉業を述べていることの目的を考える時に、この本の編纂の目的の一部を感じる。さらにどさくさ紛れに多くの官僚がいる中を藤原不比等だけを名前まで上げて褒め称えることは、天皇制の維持の大切さと同時に、藤原一族の繁栄を願って作られた本とも考えられる。

そして、葛野王の口を借りて述べられたことは、天皇制の継承の根幹のルールを高らかに宣言したことに通じる。それは書紀にもないことであり、書紀の完成段階で書き留められなくてはならなかったことを後世に出来た『懐風藻』が補足しているとしか受け止めることができない。したがって、この作品の作者は、断じて淡海三船ではなく、藤原氏の血を引き『懐風藻』にも名前がある「藤原房前・宇合」らではないかと考える。

前回の例会の話題

- ・『万葉集』編纂の意義を問う
刈谷市 酒井 誠
- ・蘇我氏の歴史（乙巳の変まで）
一宮市 畑田寿一
- ・大海人皇子の生年と出自
名古屋市 石田泉城

例会の予定

■ 例会の予定 次回は土曜日に開催です！

- 1 日時 2月19日(土) 13時半～(第2集会室)
- 2 場所 名古屋市市政資料館

■ 来月以降の例会

3/20(日)、4/9(土)、5/15(日)、
6/25(日)、7/17(日)

*土曜の日程が予約できず申し訳ありません。

会員の投稿について

■ 会報誌への投稿 (編集担当: 石田)
toukaikodai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日 2月28日(月)

■ 投稿文のテーマ

沖ノ島祭祀、宗像三女神、宇佐神宮と八幡信仰に関連したこと